

## 環境アセスメント学会 生態系研究部会 第6回定例会 報告

テーマ:生態系評価と水質評価の融合 - 三河湾の事例より - -

話題提供者:いであ株式会社 畑 恭子氏

日時:平成20年12月16日(火)18:30~20:15

場所:明治大学14号館6階A会議室

概要:

埋立ての環境アセスメントでは従来、水質と生態系の予測・評価を全く異なるものとして行われてきた。特に水質のモデルは、定常状態で浮遊系(水中)のみに絞った、低次生態系モデルで予測・評価を行われてきた。しかし、特に浅海域では、浮遊系(水中)と底生系(海底)との間の物質のやりとりが水中環境に与える影響が大きいことが明らかになってきている。

そのため、今回の三河湾の事例では埋立ての予測・評価のモデルに、浮遊系モデルのみではなく、浮遊系と底生系のカップリングモデルを適用した。底生系の基本的な構成要素としては、付着藻類、メイオファウナ、マクロベントス、大型海藻・草類、間隙水水質、デトリタス(懸濁態有機物)等を組み込み、出水などのイベント時のデータも利用した非定常モデルとして三河湾の複数案の埋立計画に適用した。併せて、三河湾で環境アセスメントを行った場合に、生態系項目での典型性の種になりうるアサリについて、その幼生を粒子と捉えた拡散モデルを作成し、その影響を比較した。

講演後、アサリの採取・成長をモデルに組み込む手法、モデルの結果にあるイベント後の急激な塩分濃度の変化の理由、台風のようなイベントが環境に与える影響の大きさ、今後の同モデルに適応できる生物種の可能性、新しい技術の開発に併せて行政に求められること、生物の生息に関する閾値に関する研究の重要性、生態系の評価項目に追加すべき事項等について活発な質疑・議論が行われた。

文責 中島慶次(環境省)